

行雲流水

坂口安吾

青空文庫

「和尚さん。大變でございます」

と云つて飛びこんできたのは、お寺の向いの漬物屋のオカミサンであつた。

「何が大變だ」

「ウチの吾吉の野郎が女に惚れやがつたんですよ。その女というのが、お寺の裏のお尻をヒツパタかれたあのパンスケじやありませんか。情けないことになりやがつたもんですよ。私もね、吾吉の野郎のお尻をヒツパタいてくれようかと思ひましたけどネ。マア、和尚さんにたのんで、あの野郎に説教していただこうと、こう思ひましてネ」

「あの女なら、悪いことはなかろう。キリヨウはいゝし、色ッぽいな。すこし頭が足りないようだが、その方が面白くて、アキがこないものだ」

「よして下さいよ。私や、パンスケはキライですよ。いくらなんでも」

「クラシが立たなくては仕方がない。パンスケ、遊女と云つて區別をすることはないものだ。吾吉にはそれぐらいで、ちようど、よいな」

「ウチの宿六とおんなじようなことを言わないで下さいよ。男ツて、どうして、こうなんだろうね。女は身持ちがキレイでなくちゃアいけませんやね。ウチノ宿六の野郎もパンスケだっていゝじ

やないか、クラシが立たなくちやアほかに仕方があるめえ、なんて、アン畜生め、いゝ年してパンスケ買いたいに違いないんだから。覚えていやがれ。和尚さんも、大方、そうでしょうネ。まったく、呆れて物が言えないよ」

「だから拙僧に頼んでもムダだ。私だったら二人を一緒にしてしまうから、そう思いなさい。罪なんだ」

「なにが罪ですか。いゝ加減にしやがれ。オタンコナスめ。けれども、ねえ。お頼みますよ。吾吉の野郎をよこしますから、本堂かなんかへ引きすえて、仏様の前でコンコンと説教して下さいな」

こういうワケで、和尚は吾吉と話をすることになったのである。

「お前、裏の女の子と交ったかな」

「ハ。すみません」

「夫婦約束をしたのだな」

「イエ。それがどうも、女がイヤだと申しまして、私は氣違ひになりそうでございます。私があの女にツギこんだお金だけが、もう三十万からになっておりますんで。いッそ、あのアマを叩き斬つて、死んでくれようか、と」

「コレコレ、物騒なことを言うもんじゃないよ。ハハア。してみると、お前さん、女を金で買ってみたワケだな」

「そうでございます。お尻をヒツパタかれたパンスケだと申しますから、あんなに可愛らしくツて、ウブらしいのに、金さえ出しや

物になる女だな、とこう思いまして、取引してみたら、案の定でさア。けれども知つてみると冷めたくつて、情があつて、こう、とりのぼせまして、エッヘ。どうも、すみません。頭のシンにからみこんで、寝た間も忘れられたもんじゃ、ないんです。よろしく一つ、御賢察願いまして、仏力をもちまして、おとりもちを願ひ上げます」

「バカにしちやア口上がうまいじゃないか。冷めたくつて、情があつてか。なるほど。ひとつ、仏力によつて、とりもつて進ぜよう」

ノンキな和尚であつた。彼はドブクロづくりと将棋に熱中して、お経を四半分ぐらいに縮めてしまうので名が通つていたが、町内

の世話係りで、親切だから、ウケがよかった。

お寺の裏のお尻をヒツパタかれたパンスケというのは、大工の娘で、ソノ子と云った。終戦後父親が肺病でねついてしまって、ソノ子は事務員になって稼いだが、女手一つで、病父や弟妹が養えるものではない。いつとはなく、パンスケをやるようになった。外でやるぶんには、よかったが、時々、家へ男をひきこんでやる。とうとう病父がたまりかねて、ソノ子をとらえて、押し倒して、お尻をまくりあげて、ピシピシなぐった。なぐりつゝ、吐血し、力絶えて、即死してしまった。ソノ子はオヤジを悶死させた次第であつた。

そのセツカンのすさまじさというものは、それがイノチの終り

の激しさを現したのかも知れないが、近所の人々がとびだして見物にきた程であつた。呆氣にとられる人々の眼前で、彼は全力をだしきつてソノ子のお尻をヒツパタいて、ことぎれてしまった。

「病人はヒステリーになるものだ」

と云つて、物分りのよい和尚はお通夜の席でソノ子をかばつてやつたものである。

「ほかに感謝の現しようもないので、お尻をヒツパタいたんじや。人間はそんなもんさ。ホトケは感謝しているのだよ」

誰もなんとも言わなかつた。

「これよ。お前のお尻は可愛いゝお尻だよ。オヤジの寿命を養い、薬代を稼いだ立派なお尻だよ。なにも恥じることはないさ」

まったく可愛い、お尻だろうと思われた。小柄で、痩せぎすであつたが、胸やお尻には程よい肉がムツチリしていて、見るからに情慾をそゝるのである。和尚の様子が、今にもソノ子のお尻をさすりそうな感極まつた情愛がこもつて見えたので、人々は妖しさに毒氣をぬかれたのであつた。

吾吉のたのみを受けたので、ソノ子を訪ねると、弟妹は学校へ行つたあと、男靴が一足あつて、誰か押入れへ隠れた様子である。「これよ。出て来なさい。まんざら鼠ではないようだ。隠れることはない。人が隠れてきいていては、思うように話もできない。オヤジがお尻をヒツパタいて悶死したからには、男が遊びに来て泊つていても不思議はないさ」

ソノ子はうつむいている。和尚が立ち上って押入れをあけると、若い男がちぢこまって坐つて、これも、うなだれている。観念して、這いだしてきた。

「ま、そこへ坐つていなさい。色ごとの邪魔をして、相済まんとじゃ」

和尚はトンチャクしなかつた。

「実はな、漬物屋の倅せがれにたのまれてきたが、あれはお前にゾッコン惚れているそうだ。お前がよければ結婚したいと云っているが、そちらの都合はどうだね」

「こちらは、都合がわるい」

「イヤにハッキリ物を言う子だね。お前さんは不都合かい」

「私もお父さんにお尻をヒツパタかれて、そのせいでお父さんが寿命をちぎめたからには、意地でもパンパンで一生を通さなければなりません。通してみせます」

「これは、ちかごろ、勇ましいことをきいたものだ。武士は額の傷を恥じる。支那で面子^{メンツ}というな。顔が立つ立たないとは昔からきいているが、当世の女流はお尻で顔を立てるのかい」

「そんなことは知りませんが、弟や妹を養って行かなければなりませんから、ショーバイはやめられません。まして御近所の人たちはパンスケ、パンスケって、人の顔をジロジロ睨むんですから、こんな意地の悪い人たちのところへお嫁入りなんてできません」

「それは、もつともだ。しかし、吾吉と結婚したくないのは、吾

吉がキラいのせいではなくて、お前さんの意地のせいだね」

「いゝえ。吾吉もキラいですよ。好きならタダでも遊んでやりま
す。キラいだから、お小遣いだの買物だのとセビツてやったん
じやありませんか。あの人ツたら、お前に三十万もつぎこんだん
だから結婚しておくれ、なんて、イヤな言い方ツたら、ありやし
ないわ」

「なるほど。一々、もつともだ。漬物屋へお嫁に行つても、お前
さんたち家族は不幸せになるばかりだし、先方も大いに不幸せに
なることだろう。万事拙僧が見とゞけたから、パンパンに精をい
れてはげむがよい」

和尚は立ち歸つて吾吉に引導をわたした。

「畜生。あのアマ、そんなことをぬかしたんですか。カンベンならねえ」

「ダメだよ。血相かえてみたって、話がまとまるワケはない。あの子はヒツパタかれたお尻に意地を立てゝいるんだから、お前なんかと心得が違う。いさぎよく諦めなさい」

「エツヘツへ。私もムリなことはキライなんですが、どうも、怪しからんことになりやがったもんですよ。あん畜生め。叩ツ斬つてキザンでやらなくとも、せめて坊主にしてやりてえ」

大変恨みを結んだ様子。和尚も心配して、ソノ子に会って、吾吉の様子がこれこれだから用心したがよい、と教えてやると、
「えゝ、ありがとう。私これから出張する男の人に三週間ばかり

旅行に連れて行ってもらいますから、ちょうど、よいわ。三週間もすぎると中には、たいがい、あの人の気持も落付くでしょう。

自分勝手ばかり言うから、あんな男はキライですよ」

と、弟に留守中のお金を渡して、そのまゝどこかへ消えてしまった。

仏家に行雲流水という言葉があるが、ソノ子の如きは、まさしく雲水の境地を体得したものだろうと和尚は感心した。概ね雲水などというものは、至極わりきれない精神や、肉体を袈裟につゝんで諸方をハイカイするにすぎないようなものであるが、ソノ子の場合はそのような不明快なものではない。すべてはハッキリとわりきれており、要するに、お尻というものが天下を行雲流水し

ているだけのことである。まことに明快と云わねばならぬ。いかなる祖師も一喝をくらわせる隙がないようであつた。

ソノ子はまだ十八。普通なら、まだ女学生にすぎない発育途上の小娘であつた。その姿態にはまだ未成熟なものが多く翳を残しており、お乳とお尻がにわかにムツチリと精気をこめて張りかゞやいているようであつた。

あのお尻が行雲流水していやがるか、と、和尚もいさゝか妬たましく感じる。いゝ年をして、とても一喝どころの段ではない。和尚の方が三十棒をくらう必要があるのである。

「当世は、久米の仙人などはシヨツチュウ目玉をまわしていなきやならないのさ。オレだから、ガンバツていられるようなものだ」

と、和尚はわずかに慰めるのである。

ところが三四日して吾吉が行方をくらしました。会社の金を五十万円ひきだして逃げたことがわかったのである。調べてみると、それ以前にも五十万ほど使いこんでいることが分った。それをソノ子につぎこんでいたわけである。

「まったく、和尚さん、呆れかえった唐変木ですよ。三十万ソノ子にとられたなんてウワゴト云ってやがったんですが、この野郎、何をぬかしやがるかと思っていたんですがね。まさかに、泥棒して貢いでいるとは気がつきませんでしたよ。あげくにソノ子と手と手をとって逐電しやがったんでしよう。バカな野郎でございませう」

「吾吉はヤケクソでやったのさ。ソノ子と一緒にではあるまいな。

あの子吾吉には鼻をひっかけないはずだよ」

「へエ、仰おっしゃ有いましたね。悟ったようなことを言いやがらない。

このオタンコナスめ。けれども、和尚さん。私や、どうしたら、いゝでしょうねえ」

「当人の行方が分らないのだから、ここで氣をもんでも仕方がない。お前さんも女だてらにポンポン云うばかりで思慮がないから、ロクな子供が育たない」

「へえ、悪うござんしたね。蛸坊主め、氣どつていやがら。だけど、和尚さん、八卦はっけかなんか立てゝ下さいな。あの野郎の襟クビふんづかまえて、蹴ッぽらかしてくれるから」

漬物屋のオカミサンは、蹴ッぽらかすなどという異様な言葉で威勢のほどを示したが、警察へよびたてられる、新聞記者は押しかけるで、ムカツ腹を立てゝいたのである。

ところがそれから十日目ぐらいに、五十万円使い果した吾吉は、サガミ湖の山林でクビをくくって死んでいた。盗んだ金の多くはバクチで失ったようであつた。



「和尚さん。すみませんけど、あの野郎、まだ成仏ができないようですから、お経をあげて引導わたしてやって下さいな。夜中に

なると、骨壺がカタコト鳴りやがって、うるさくツて仕様が
ないんですよ」

「気のせいだよ。お前さんも神経衰弱になったんだろう。オカミ
サンに限って、あの病気にかからないと思っていたが、世の中は
一寸先がわからないものだ」

「バカにしちや、いけないよ。あんなバカ野郎が一束クビをく
りやがったって、私が神経衰弱なんかになるもんかね。和尚さん
がお経を切りすてるから、あの野郎が成仏できないのよ」

「ちかごろは物覚えがわるくなつてな。お経などゝいうものは、
切りすてるほど味のであるものだ。いずれヒマの折にお経をつぎた
してあげるから、ゆっくり亡魂と語り合うのがよろしかろう」

「ふぎけやがんな。オタンコナスめ」

と、漬物屋のオカミサンは怒って帰って行つたが、一時間ほどすると、浮かない顔でやってきた。

「和尚さん。呆れかえって物が云えないやね。本当に亡魂がでゝきやがつたんですよ」

「珍しいな。何か言つたか」

「そんなんじゃないですよ。骨壺がガタガタ云うのもおかしいでしょう。廿日鼠かなんかいるんじゃないかと思ひましてね。骨壺をあけて、調べてみたんですよ。新聞紙の上へザラザラぶちまけて掻き廻したんですが、変つたことありませんやね。そのうち、なんの気なしに、齒のところを拾いあげたと思ひなさい。あ

の野郎の前歯に数字が書いてあるんでさア。三十とね。私や横文字が読めませんから分りませんが、宿六の野郎が生意気に横文字なんか読みやがって、三十だてえことなんです。呆れかえるじゃアありませんか。あの野郎、パンスケにふんだくられた三十万円の恨みが忘れかねているんですよ」

「どれ、その歯を見せてごらん」

見ると、なるほど、茶色の模様のような筋がある。三十とよめないこともないが、ハッキリ三十というわけでもない。生前、歯に彫りつけたというわけではなく、書いたものがアブリダシで現れたようなアンバイである。

将棋狂の和尚は探偵趣味もあるから一膝のりだして、

「ウム。よろし。拙僧が取り調べてあげるから、オカミサンも一緒にきてごらん」

和尚は知りあいの歯科医を訪ねた。歯科医は、歯をひねくりまわしていたが、

「どうも、見当がつきませんな。私は死人の歯を治療したことがありますから、なんとも云えませんが、これはたゞの偶然で、なんでもないことじゃありますまいか」

「このホトケはクビをくっつて自殺したのですが、死ぬ前に、歯にアブリダシで字を書いておいたら、骨になつてから、こうなるのと違いますか」

「さア、どうでしょう。歯にアブリダシを書いた話はきいたこと

がありませんが、口の中は濡れているのが普通ですから、アブリダシを書いても流れて消えて失くなりはありませんか。これは何かの偶然でしょう。私は骨になった歯など見たことがないので、シサイに見たら、こんなのは例が多いのかも知れませんか」

「しかし、アブリダシということも考えられるでしょうな」

「和尚さん。バカバカしいじゃありませんか。子供じゃアあるまいし、頭をまるめたい年寄が、アブリダシ、アブリダシって、ナニ云ってやがんだい。吾吉のバカ野郎の恨みがこもって、ここへ現れているんだよ。お経をケンヤクしやがるから、こんなことにならアね。どうもね、骨壺の騒ぎ方が、ひとかたならないと思いましたよ」

「よし、よし。それなら、骨壺を預りましょう。本堂へかぎつて、三七日ほど、ねんごろに読経してあげよう」

和尚は仕方がないから骨壺をひきとった。さもないと出向いてお経をあげなければいけない。本堂にひきとつて飾っておくぶんには、ほッたらかしておいても、誰にも分らない。

そのうちに、ソノ子が行雲流水から戻ってきたから、本堂へよんだ。

「実はな。お前の留守中に吾吉がクビをくくつて死んだよ」

「そうですつてね。死神に憑かれたんでしよう。そんな男、たくさん、いてよ」

「漬物屋のオカミサンが怒鳴りこみやしなかったかい」

「まだ来ませんけど、今さら、仕様が無いじゃありませんか」

「それもそうだが、吾吉はお前に使った三十万円が心残りだそう
でな。骨壺が深夜になるとガタガタ騒ぐ。おかしいというので、
あけて調べてみると、前歯に三十という字が浮きでゝいるのだよ。
三十万円で浮かばれないというワケだ。それ、そこにあるのが吾
吉の骨だから、押んでやりなさい。回向えこうになるよ」

「私はイヤです。押むなんて」

ソノ子は怒った。

「おとなしく死んだんなら押んでもやりますけど、私に恨みを残
して死んだなんて、ケチな根性たらありやしないわ。それなら、
私も憎みかえしてやります。私はお父さんにお尻をぶたれた時か

ら、世の中を敵だと思つていきますから、吾吉の幽霊なんか、なんでもないわ」

「気の強い娘だよ。これほどの娘とは知らなかったね」

和尚は骨壺を持ってきて、中を掻き廻して前歯をとりだした。

「これ、これ。ここに三十とあるだろう。拙僧は、奴め、口惜しまぎれにクビククリの寸前にアブリダシを前歯に仕掛けやがったなど睨んだが、漬物屋のオカミサンは、亡魂がこの地にとどまつて、齒に文字を書いたというのだよ。あゝいうウスバカは執念深いから、死後にも何をやらかすか分らない。ワシはお経をケンヤクするから、奴め、なかなか浮かばれないな」

ソノ子は齒をとりあげて、見ていたが、怖れる様子は一向にな

かった。

「いゝわよ。憎んでやるから、覚えてるがいいわ。あんた一人じゃないわ。これから何人だって、こんなことになるでしょうよ」

ソノ子は大胆不敵なセセラ笑いをうかべて、前歯を骨壺の中へ捨てた。

「いゝ度胸だ。お前は好きな人がいるのかい」

「大きなお世話だわ」

「お世話でもあろうが、教えてもらいたいね。当世の女流はわけが分らないから、指南を仰ぎたいのだよ。ワシもダイコクを三人もとりかえたり、その又昔はコツやナカへ繁々と通ったものだが、当世の女流はわからん」

「私のお尻をぶちながら死ぬなんて、卑怯でしょう。吾吉だつて、同じように卑怯なのよ。男はみんな卑怯だと思つていゝわ。私は、男なんか、憎むだけよ。みんなウスバ力に見えるだけよ」

「なるほど。そんなものかな。そういえば、たしかに、男はウスバ力だよ。とんだヤブヘビとは、このことだ。しかし、吾吉は、お前を叩き斬ツてきざんでやりたいが、そうもいかないから、せめて坊主にしてくれたいと恨んでいたから用心するがいゝ。亡魂は根気のいゝものだ。坊主をしていると、よく分る。三代まではタタラないが、一代だけは根気よく狙いをつけているものだよ」

ソノ子は薄笑いをうかべただけで、返事もせずに、サヨナラと歸つてしまった。

和尚はシミジミ骨壺を見つめた。男はみんなウスバカに見えるという言葉が、身にこたえたのである。

男はたしかに凡夫にすぎない。ソノ子のお尻の行雲流水の境地には比すべくもないのである。水もとまらず、影も宿らず、そのお尻は醇じゅんこ乎としてお尻そのものであり、明鏡止水とは、又、これである。

乳くさい子供の香がまだプンプン匂うような、しかし、精氣たぐましくもありあがつた形の可愛い、お乳とお尻を考えて、和尚は途方にくれたのである。お釈迦様はウソをついてござる。男が悟りをひらくなんて、考えられることだろうか。

亡魂この地にとゞまり、前歯に恨みの三十万円を書きしるして、

夜ごとに骨壺をゴソゴソ騒がせるといふ吾吉は、男の中の男勇士かも知れない。明鏡止水とはいかないが、ウスバカにしては出来がよい。和尚は骨壺に、はじめて親愛の念をいだいたのである。けれどもドブクロ造りが忙しいので、お経はよんでやらなかった。



和尚がソノ子の家を訪ねたとき押入れへ隠れた男は、ソノ子と最も深間へ落ちているウスバカの一人であつた。彼はソノ子をつれて三週間の出張旅行を共にしたが、出張とはデタラメで、公金を持ち逃げして、盲滅法逃げまわっていたのである。つまり吾吉

と同じ境地であつた。

帰京して、ソノ子から吾吉のクビククリの話や骨壺の話をきいて、つくづく情ない思ひになった。彼自身、せっぱつまり、クビククリの一足前まで来ていたからである。

「吾吉氏とボクとは違ひだらうな。キミはボクを愛してくれてゐるんだらう」

と、男は心配して、きいた。

「吾吉とアナタじゃ違ひうわ。アナタは好きよ」

「そうか」

男は考えこんだ。

「しかし、みんな打ちあけると、キミはボクがキライになるんじ

やないのかな」

「そんなことないわ。私、男の人が好きになつたのはアナタがはじめてだわ。だから、すてないでね」

男は又、考えこんだ。

「じゃア、思いきつて、言つてやれ。もう、思いきつて、言つてしまふほかに手がなくなつたんだ。ボクは今日にも自殺するほかには手がなくなつたんだ」

「アア、そんなこと、ある筈ないじゃないの」

「キミには、わからないことさ。ボクは吾吉氏と同じ境遇なんだよ。わかつたかい。出張なんて、デタラメさ。会社の金を使いこんで逃げ廻つていたんだよ。盗んだ金も、なくなつたんだ。ボク

は強盗して生きのびるほどの度胸はないから、死ぬよりほかに仕方がない。旅先でも、死場所を探していたのだが、ズルズル東京へ戻ってきてしまったのさ。ただキミと一緒に死んでくれるかどうか、それが不安で、今まで生きてきたゞけだよ」

「私だって、アナタが死んでしまえば、生きているハリアイがないわ」

ソノ子はこんなに気が弱くなったことはなかった。まだ、十八の小娘なのである。そのときまで毛頭思いもよらなかった死というものに、にわかに引きこまれるような気持になった。彼女は急に男が可哀そうで、いとしくなったのである。

たぶん吾吉の境遇との暗合のせいであろう。十八という年齢が、

それをうけとめるだけスレていなかったのである。ソノ子はむしろ自分から飛びこむような激しい思いになった。

「私だってパンスケなんかして、生きていたくないわ。だけど、パンスケ以外に、生きる道がないわね。アナタが死ぬなら、私も死ぬわ」

男はポロポロなきだした。ほかに表現がなかったのである。それほど思いつめていたのであった。

ソノ子も心がきまると、死に旅立つことが却って希望にみちているような張りがわき起った。彼女は男を残して、髪結屋へ行き、桃割れに結ってもらった。いつペン、桃割れに結つてみたいと夢にまで見て、果したことがなかったからである。

たくさん御馳走をこしらえて、弟や妹も一緒に最後の食事をたのしんだ。ソノ子は髪がくずれることを怖れたので、男の最後の要求も拒絶して、枕に頭をつけず、夜更けまで坐り通していた。「まるで、ボクやボクたちの愛情よりも、桃割れの方が大切みたいじゃないか」

男はソノ子に恨みを云った。

「そんなこと言うのは、アナタに愛情がないせいよ。もう、ほかのことは忘れて、死ぬことばかり考えましようよ」

「そうか。そうだ。キミはきつと聖処女なんだ」

男は後悔し、感激して、又、泣き沈んだ。そして二人は、夜の明け方、まだまっくらな中を冷い朝風をあびて、すぐお寺の横を

走っている鉄道線路へ並んでねた。

「胴体が真ツ二つじや汚らしくツてイヤだから」

と、かねて相談の通り、胴体から足は土堤の方へ、クビだけを線路の上へのせたのである。

ソノ子が怖くなったのは、その時からであつた。

「さむい。だいて」

ソノ子は男に接吻した。そして、立っている男と女が接吻する時のように、巧みに顔をひいて、男には悟らせずにクビの位置をひっこめた。そして男の顔へ、上から唇を押しあてた。

一番列車がやってきたのは、その時だ。ソノ子は唇をはなして、自分も線路を枕にするフリをして身を倒したが、彼女の頭は線路

をハミで、たゞ桃割れが乗ツかつていたゞけであつた。



「裏の線路に自殺があつたから、ひとつ、回向してやって下さいな」

と町内の者に叩き起されて、和尚は線路へあがつてみた。

死んでいるのは男だ。クビがキレイに切断されて、胴体はひかれた位置に、全然とりみだした跡がなく残っているのである。

クビだけ十間ほどコロコロころがったらしく、サラシ首のよう
に、枕木の上にチャンと立っているのである。大きな目の玉をむ

いている。おまけに、自分をひいた汽車を見送ったように、行く先の方をマツスグ睨んでいるのであつた。ちツとも取り乱したところがない。

「行儀がいゝねえ。このマグロは、自分をひいてくれた汽車に、御苦労様でんで、挨拶しようてえ心意気なんだな。ユイシヨある血筋の若ザムライかも知れないよ」

「ハテナ」

和尚はクビを見つめた。

「アツ。あの男だ」

押入れの中に隠れていた男なのである。さては、とうとう、やりやがったか。死ぬ奴は吾吉一人じゃないわよ、と言いやがった

が、お尻の復讐の二人目が成就したのである。

「オーイ。こんなところに、女のマゲがスツ飛んできていやがるよ。このマゲは桃割れだ。頭のツケ根からスツポリ抜けてきたんだね」

一人が離れたところで、こう叫ぶ声がきこえた。

「そういえば、ここところへ女の下駄がスツ飛ばされているぜ。じゃア、女もひかれているのかな」

どうやら明るくなり、かなり人々が群れていた。そのとき、下駄を見つけた男がトンキョウな叫びをあげたのである。

「ヤ、女の屍体を見つけたぞ。ドブの中へハネ飛ばされていやがら。鼻だけ出していやがら。アレ。生きてるんじゃないかな。水

の中へ沈まないように、手で支えていやがるぜ」

大急ぎで、その場へ駆け寄ったのは和尚であつた。

彼はムンズと襟をつかんで、水の中から、ひきぬいた。ソノ子である。ソノ子は目をあけた。

「ハハア。さては、死んだふりをしていたな。見届けたぞ」

和尚は思わず大声で叫んだ。

頭の毛がスツポリ抜けているのである。そのほかには、どこにも怪我がないようだ。毛の抜けたハズミにドブへころがり落ちたのか、人の気配に、ソツトドブへ身を沈めたのか、わからない。

けれども、和尚には一つの情景が目に見えるようであつた。一緒に死ぬと見せて、髪の毛だけしか轢かせなかったソノ子の手練

のたしかさ。これが十八の初陣とは、末恐しい話である。

和尚は突然亢奮した。

「このアマめ。キサマ、死ぬと見せて、男だけ殺したな。はじめから、死ぬる気持がなかったのだな、悪党めが！」

和尚はソノ子を投げ落すと、うしろをまくりあげて、ズロースをひきはいだ。まっしろなお尻が現れた。

「これだ。これだ。このヤツだ」

和尚は氣違ひのようだった。お尻をきりもなくヒツパタいているのである。巡査が和尚を遠ざけるのに一苦労したのである。

和尚の行動は、人々には、疑惑をまねかずにすんだ。ソノ子の死んだ父親が果すべきセツカンを、和尚が代ってやったゞけのこ

とだと思われたからである。

和尚は然し、一つの闘争でもあつたのだらう。そのくせ、和尚はそれによつて一向に救われなかつた。

結論として云えば、吾吉の亡魂がかねての宿願を果してソノ子を坊主頭にしたという一つの成就があるだけであつた。

髪の毛は一年もたてば生えるものだ。ソノ子は全然こまらなかつた。そして、もう、これから先は心中などせずに、ウスノ口を徹底的にしぼつて苦しめてやろうと決心したゞけのことであつた。

青空文庫情報

底本：「坂口安吾全集 08」筑摩書房

1998（平成10）年9月20日初版第1刷発行

底本の親本：「オール読物」

1949（昭和24）年9月1日発行

初出：「オール読物」

1949（昭和24）年9月1日発行

入力：tatsuki

校正：noriko saito

2009年1月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

行雲流水

坂口安吾

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>